

フレドリック・ジェイムソンのユートピア概念について ——その文化研究的可能性——

梅原宏司

1. はじめに

本論文は、アメリカのマルクス主義批評家であるフレドリック・ジェイムソン（1934-）の「ユートピア」概念に関して論述を行い、その文化研究（カルチュラル・スタディーズ）への可能性について考える試みである。

ジェイムソンは、ポストモダニズムに関する分析¹⁾で知られ、また建築論を多くものしているため、日本ではもっぱら「建築批評家」として有名である。しかし、じっさいにはサルトルに関する博士論文²⁾で学位を取得して以降、文芸批評家として活躍してきた。また、フランクフルト学派をはじめとする西欧マルクス主義をアメリカに紹介する際におおいに貢献している（この紹介の書が、日本では『弁証法的批評の冒険』として訳された“*Marxism and form*”である）。そして、西欧マルクス主義者として分類されるエルンスト・ブロッホやテオドル・アドルノに由来する「ユートピア」の概念をおおいに用いて建築や文芸に関する批評活動を行ってきた。

本論文は、まず第2章において、ブロッホに由来するジェイムソンの「ユートピア」概念の端緒について考え、さらにジェイムソンが述べている「ユートピアとイデオロギーの弁証法」概念と「宗教」の関連性について分析する。第4章では、ジェイムソンがホルクハイマーとアドルノの著作における「ユートピア」の可能性についてどのように考えているかを論述する。そして第5章では「ユートピア」概念が文化研究に今後果たす可能

性について考えていきたい。

2. ブロッホとジェイムソン—「ユートピアとイデオロギーの弁証法」、そして宗教

2.1. ブロッホの「ユートピア」とはなにか

まずは、エルンスト・ブロッホ（1885-1977）とジェイムソンの関係について述べていこう。

ブロッホは、西欧マルクス主義のなかでも、きわめて独特な哲学者として知られている。その中でも1959年に刊行された『希望の原理』（*Das Prinzip Hoffnung*）は、主著と目されている。この書は、ブロッホ哲学の中心的なキーワードである「希望」について、その概念的検討から、具体的なあらわれ方までを膨大かつ詳細に考察したものである。日本でも、1970年代に翻訳が試みられ、1982年に白水社から全3巻で翻訳が完成した。

ジェイムソンは“*Marxism and form*”のなかで、まずブロッホについて以下のように述べる。

ブロッホの解釈学は、ほかならぬ対象自体の多様性のなかにその豊かさを見いだすのであり、それが最初にもっていた概念的内容は相対的に単純で、不変のままである。だから、われわれがどこへまなざしを向けようと、少しずつ、世界のなかのすべてのものはある原初的な形象の変形となり、未来へ向かう運動・ユートピアという転形された世界との最終的な同一性へと向かう本源的な運動の現出

となる。しかもこのユートピア的世界の生き生きとした現前は、希望自身の道具や装置によって、どんな歪曲の背後にも、どのような抑圧層の下にも、いかにかすかであれ、つねにあばき出されることになる。(Jameson 1971=1980 : 88-9)

すなわち、ブロッホにおける「ユートピア」概念というのは、現在の世界が最終的に理想的な世界へと向かう運動の原動力となるものなのである。この運動は、ブロッホ自身の場合はマルクス主義であるが、それ以外にも（ブロッホによれば失敗に終わることが運命づけられているものの）さまざまな世界の「乗り越え」の試みが存在する。この試みを数多く詳細に取り上げ検討したのが、ブロッホの名著『希望の原理』である。それは現実のあらゆるレベルにあらわれた希望の姿の探索であって、フロイトなどの精神分析的試みの検討からはじまり、倫理学、論理学、政治学、科学技術論、社会学、芸術、宗教などにあらわれるユートピアの原型を包括的に説明するという「希望の百科全書」ともいえる書なのである (Jameson 1971=1980 : 89)。

しかし、このような探索に必要な条件がある。それは「希望」を考えることである。

すなわち、「希望」、万物がユートピアに向かう知覚不可能な傾動、広大な宇宙自身のもっとも小さい細胞のなかでけいれん的で微視的な働きを発揮して動きまわる未来、などについての諸々の形象が、世界そのものの内と外で痕跡 *Spuren*³⁾ 一痕跡、足跡、しるし、記号、「私がここで読みとらねばならないあらゆるものの相」一としてわれわれに知られるようになるまさにその過程についてのある最初の洞察がなければ、このような探索は始まらないのである。(Jameson 1971=1980 : 89. 傍点は原文通り)

このように「希望」というものは、ブロッホにあっては、資本主義的生産様式のもとで、事物の表面にかすかにあらわれたり、ゆがんであらわれたりするものなのである。そうした「希望」という、ユートピアに向かって人々を突き動かす衝動を理解し解読・解釈することによって、資本主義を変革する契機が生まれるというのが、ブロッホの「革命」の意味なのである。

ジェイムソンは、こうしたブロッホの「ユートピア」概念を受け継ぎながら、彼自身の「ユートピアとイデオロギーの弁証法」という分析手法を編み出した。それを次に見てみよう。

2. 2. 「ユートピアとイデオロギーの弁証法」

ジェイムソンは、“Marxism and Form”のあとに著した『政治的無意識』(“*The Political Unconscious*”)において、デュルケムの宗教理論を援用しながら、これとブロッホのユートピア概念を結びつけて「ユートピアとイデオロギーの弁証法」を考えだした。まずは、ジェイムソンがデュルケム理論をどのようにとらえているかを見てみよう。

ルソーからヘーゲルやフォイエルバッハにいたる複数の潮流を収斂させた観のあるその体系では、宗教を、象徴的肯定の行為と捉えている。特定の部族社会や集団、さらには社会構成体の統一を象徴的に肯定するもの、それが宗教というわけである。したがって、デュルケムの社会学では、現代世界の社会崩壊ならびに《無秩序》の分析の場に、古代社会的ないしユートピア的統合の象徴として宗教が登場する。(Jameson 1981=2010 : 535)

デュルケムの「社会・集団の統一を行うものが宗教である」という観点は、こんにちの社会学では広く共有されているものと考えられるが、ジェイムソンの独創性はその次の段階にある。つまり、この理論を「文化研究」の分野に適用しようとす

るのである。

私がいいたいのは、文化を機能面や道具面から考えることの弊害といった問題など、ここで私たちが考えるユートピア的パースペクティヴのなかでは、根本的に克服できるし、解消することもできるということなのだ。たとえば、ルソーは、社会が社会そのものと、社会それ自体の統一を祝福する契機として、祭りというものを考えた。またデュルケムは、宗教のなかに、社会を統一する「機能」をみるという同様の考え方を示した。そして私たち自身も、真正のユートピア願望、集団統一願望のあらわれとして文化を考えようとしている。……別のいい方をしてもいい。デュルケムは、人間諸関係を象徴的に肯定するものとして宗教を考えた（この考えを私たちは文化活動一般にまで押し広げようとしたわけだ）。これと並んで、ハイデガーは、人間と、人間以外のもの、つまり〈自然〉とか〈存在〉との関係を、象徴的に再演=制定するものとして芸術作品を考えた。（Jameson 1981=2010：537-8）

つまり、ジェイムソンの考えでは、「文化」（あるいは芸術）と「宗教」というものは同じ役割をもつというのである。その役割とは、分断・個別化され疎外された個をまとめるものとしての機能である。分断・個別化され疎外された個は、疎外のない世界を求めて集まってくる。この疎外のない世界とは、ブロッホの呼び方でいえば「ユートピア」なのである。

ブロッホは「文化」という観念について、マルクス主義の立場から以下のように述べている。

ある時代の支配的な思想としてのイデオロギーは、マルクスの的確な命題によれば、支配階級の思想である。しかしまた、この階級も自己疎外された階級なので、自分の階級の

繁栄を人類一般の繁栄にすりかえる打算のほかには、疎外のない世界という、ノスタルジアと追い越しの観念が、イデオロギーのなかに入り込んだのである。この観念は、とりわけ市民社会においては、文化と呼ばれている。それはまた、ふだん疎外のなかで安閑としている階級にも、ユートピア的な機能が部分的に働いていることを示している。（Bloch 1959=2012：242-3）

この文章は、二つのことを示してくれている。第一に、ブロッホは「イデオロギー」を、いわゆる「虚偽意識」としてだけでなく、「ユートピア」としてとらえているということである。第二に、ブロッホはイデオロギーの必須条件として「疎外のない世界」という要素をとらえているということである。このとらえ方からいえば、デュルケムたちの「宗教」と、ブロッホの「文化」のとらえ方は同じ構造をもつといってよい。

ジェイムソンは、このようなブロッホの「文化」のとらえ方をひきつぎ、この「イデオロギー」と「ユートピア」の関係を、次のようにパラフレーズしている。

むしろ私たちが考えるべきは、弁証法的思考が、いまだ存在せざる集団性を予期するものであるということなのだ。この意味で、まずイデオロギー的なものを、同時にユートピア的なものと捉え、返す刀でユートピア的なものを同時にイデオロギー的なものと捉えるようにしなければならない。いいかえるなら、集団の弁証法が唯一思考可能な解答となるような問いをたてることが先決なのである。（Jameson 1981=2010：525）

ここで言われている「いまだ存在せざる集団性」とは、現在の資本主義体制（それはたえず共同体・共同性を破壊し、個を疎外に追い込んでいくものと考えられている）に対するものである。

それは、ブロッホがいう「疎外のない世界という、ノスタルジアと追い越しの観念」と同じものであり、疎外のない集団性である。

こうした「ユートピアとイデオロギーの弁証法」（これは『政治的無意識』の最終章の題名である）を枠組みとして用いることによって、ジェイムソンはデュルケムらの「宗教」とおなじ役割をもつブロッホの「ユートピア」概念を、文化研究に用いることができると考える。たとえば、「とびきり低俗なもの、たとえば広告のスローガン—外見だけ華やかな生活のヴィジョンとか、肉体の変身についてのヴィジョンとか、およそ信じがたい性的充足感についてのヴィジョンなど」（Jameson 1981=2010 : 527）は、普通の見方ではイデオロギーの浅薄な表れとしてしかみることができないが、ユートピアの衝動による現実変革の試みの現れとしてもとらえることで、より深い分析が可能になるというのである。

じっさい、ブロッホ自身が、『希望の原理』のなかでこうした大衆文化テキスト分析を行っている。それは全編にわたるが、とくに注目すべきは第3部「（移行）鏡のなかの願望像（陳列品、童話、旅、映画、舞台）」である。そこでは広告や歳市の見世物、観光産業などから、クー・クラックス・クランや犯罪者の脅迫状、スリラー小説などにみられる残酷な願望像にまで分析が及んでいる。このようなブロッホの分析手法は、彼のそれまでの著作『未知への痕跡』、『この時代の遺産』、『ナチズム』などにおいて発揮された手法である。これらの著作や『希望の原理』では、ナチズムをはじめとする反ユダヤ主義の願望像が、どのように「ユダヤ人」「黒人」などの他者のいない「疎外のない世界」というユートピア願望に依拠しているかについて見事に論じているのである。

以上の考えを、別の角度からみてみよう。

私が議論する「ユートピア」は表象的なものではなく、私たち自身の未来の想像力の限界を開示するために計画された操作のことで

ある。この「未来の想像力」とは、それを超えると、私たち自身の社会・世界の想像しうる変化を、ディストピアやカタストロフィ以外に想像しえないような限界のことである。

(Jameson 2009 : 413)

ここでジェイムソンが述べているのは、「想像力の限界」ということである。すなわち、現実の社会・世界の変化ではなく、想像力の変化の限界である。もちろん、社会・世界を構成する人々の思考の限界を超えて、社会・世界が変化することはありうる。しかし、ジェイムソンが問題にしているのは、社会・世界を構成する人々の想像力の範囲内で、文化が形成されるということなのである。ここには「ユートピアとイデオロギーの弁証法」が別な表現であらわれているといえよう。

3. ホルクハイマー・アドルノとジェイムソン—反ユダヤ主義のとらえ方

ここまでの記述において、筆者はブロッホとジェイムソンの影響関係について論じてきた。しかし、ジェイムソンの「ユートピア」概念については、もうひとり触れなければならない人物がいる。それが、社会学者・哲学者として著名な、マックス・ホルクハイマー（1895-1973）とテオドル・アドルノ（1903-1969）である。アドルノは、その著書において、しばしば「ユートピア的分析」を用いている。ここではジェイムソンが、ホルクハイマーとアドルノの議論における「ユートピア」の問題をどのようにとらえているかを明らかにしてみよう。

ジェイムソンによれば、ホルクハイマーとアドルノは『啓蒙の弁証法』において、反ユダヤ主義をあつかうさいに、「ユートピア的分析」を用いている。ジェイムソンが引用する箇所をみてみよう。

人間の権利は、権力をもたない者にさえ幸

福を約束するものと考えられている。欺かれている大衆でさえも、階級が存在する限り、この約束が一般法則として偽りであることを感じており、それが彼らの怒りを呼び起こすのだ。彼らは馬鹿にされていると感じる。ひとつの可能性、あるいは観念としてさえも、彼らはそうした幸福への思いを繰り返し抑圧し、それが今にも実現しそうに見えれば見えるほど彼らはそれをよりいっそう激しく否定する。幸福があまねく否定されているところで幸福が達成されたように見える場合、彼らは抑圧の身振りを繰り返さなければならないが、それは本当は彼ら自身の憧憬の抑圧なのである。こうした反復と抑圧の機縁となるものは、それ自体がどんなに惨めなものであろうとも—アハスエルス⁴⁾やミニヨン、約束の地を思い出させる異郷の事物、情欲をかきたてる美女、雑婚を思い出させるために忌むべきものとされた獣—文明化それ自体の痛ましい過程を完全には成就、実現しなかった「文明人」の破壊欲を呼び起こすのである。発作的な感情に任せて自然を支配している人々にとって、痛めつけられた自然は、無力な幸福のイメージを反映しているのである。権力をもたない幸福について考えることは、それだけがそもそも真の幸福であるのだろうかという理由で、耐えがたいものなのである。(Jameson 1990=2013 : 190-1)

ホルクハイマーとアドルノは、「欺かれている大衆」について、さまざまな幸福それら自体を嫌悪するものとしてとらえている。ここで注目しているのは、ホルクハイマーとアドルノが「幸福があまねく否定されているところで幸福が達成されたように見える場合」という一見矛盾したケースを想定していることである。ジェイムソンはこうしたホルクハイマーとアドルノの分析を「ルサンチマン」という立場から以下のように解釈する。

俗物たちが嫌う芸術作品において、彼らが「あまりにもよく理解して」いながら理解不可能として特徴づけるものとは、もちろん芸術そのもののもっとも深遠な使命—幸福の現在における存在が否定されたその瞬間に幸福の観念を生かしておく、「破られた約束」としての「幸福の約束」—なのである。「ルサンチマンをもつ者」の情念において象徴的に働き、それによって他の社会的レベルにおいて表面化する可能性をもつものこそ、この「幸福」とユートピアの成就に対する究極的な関係にほかならない。(Jameson 1990 =2013 : 190)

この「俗物」たちとは、すなわち「欺かれている大衆」のことであるが、彼・彼女たちは、現実の幸福を自らの行動で否定する瞬間にも、同時に幸福の観念だけは生かしておくというのである。その結果、「俗物」「欺かれている大衆」は、ルサンチマンに満ちているがゆえに、決して現実の社会を現実の幸福のために変革することはしない。むしろ彼・彼女たちは、幸福の観念を実現するために、反ユダヤ主義へとコミットしていくのである。

ホルクハイマーとアドルノはこの記述を、モダニズム芸術⁵⁾を嫌悪する「俗物」「大衆」を分析した結果として行っている。アドルノが擁護する芸術とはモダニズムであるが、それと対立するのが、『啓蒙の弁証法』の中で詳しく記述されている「文化産業」が供給する「文化」である。「非＝芸術」としての「文化」は、「俗物」「大衆」の「幸福の約束」という幻想を打ち破ることはなく、むしろルサンチマンを維持しながら反ユダヤ主義に奉仕する存在となるのである。

こうしたホルクハイマーとアドルノの分析は、単純に反ユダヤ主義を虚偽意識としての「イデオロギー」として片づけるものではなく、むしろ現実の社会の変革をめぐる複雑なメカニズムを暴き出しているものである。これもジェイムソンに

とっては、「ユートピアとイデオロギーの弁証法」のひとつのあらわれなのである。

4. 「ユートピア」概念の可能性

これまで、ジェイムソンの「ユートピア」概念について論述してきた。ジェイムソンの「ユートピア」概念は、じっさいにはより複雑である。しかしここでは、筆者のこれまでの研究成果に由来する2つの例をあげ、ジェイムソンの「ユートピア」概念の適用可能性を考えることに焦点を当てたい。まずは現代世界の資本主義とユートピアの関係について、つぎに現代日本におけるナショナルリズムとユートピアの関係について考えてみよう。

4.1 ユートピアとしての「クール」

筆者は、『応用社会学研究』の55号で「クール資本主義」について論じた。この論文は、「クール」を価値とする商品が流通する現代の資本主義について、ジム・マグウィガンの「クール資本主義」という概念を分析枠組みとして執筆したものである。

マグウィガンによれば、「クール資本主義」とは次のようなものである。

クール資本主義とは、不満を資本主義自体に統合することである。「クール」とは、今日の資本主義の前-局域⁶⁾である。今日の資本主義は文化的アピールに惹きつけられる人々のためのものである。しかしとりわけ、多くの場合にフラストレーションを抱えながらも、資本主義文明の果実に憧れる人々のためのものである。(McGuigan 2009 : 1)

この場合の「不満」(disaffection)は、この箇所では説明がないが、この論文を通じて考察する通り、芸術家や若者が社会システム一般に対して抱く不満である。この不満(あるいはフラストレーション)とは、画一的なシステムからの疎外

に対するものである。このような不満を資本主義に取り込み、資本主義体制を維持し拡大していく過程を、マグウィガンは「クール資本主義」と規定しているのである。

そして、現代において「もっともクールな」企業はアップル社であり、もっともクールな商品はiPhoneである。その理由は以下のとおりである。

アップルは、「もっともクールな」企業のひとつであり、イノベーション、収益性、そして反抗的なスタイルを備えている。アップルのユーザーは自分自身を「アウトロー」として励ましており、同じ商品ばかりを金庫に配分する企業資本主義から、どうにかして自分を引き離そうとしている。「クール」とは事実上、今日の資本主義の支配的なトーンである。企業はカウンターカルチャーの伝統を統合してきており、「抵抗」という記号を市場で製品を売るために展開している。……消費者は実のところ、ハイテクと「クール」な商品の光に惹きつけられ、自分たちが「異なっており」曖昧ながらも反抗的なトーンを持っていれば、自分のすべての欲望を満足することを約束されるのである。ここでは個人の自律性と、より複雑な概念である「個人化」というものに大きな強調が置かれているのである。(McGuigan 2009 : 124)

ここで述べられているのは、既存の資本主義体制に反抗したいという願望と、それが現実の資本主義、そして商品のなかに回収されている状況である。既存の資本主義体制に反抗したいという願望は、20世紀後半のカウンターカルチャーに典型的にあらわれており、それは「他人と異なる」という個性を生かしながら疎外を乗り越えるイデオロギーすなわちユートピアとして作用する。

すなわち、「クール」によって示されているものとは、一人一人が異なった個人が疎外なき世界を目指すというユートピアなのである。そして、

それが資本主義と商品化のメカニズムに完全に巻き込まれているということが、現代の資本主義の中における人間の想像力の限界をあらわしているといえるのである。

4.2 「日本」というユートピア

筆者は、昨年の『Social Design Review』に、「日本国家の歴史における『文化』という記号の変容」という論文を執筆した。これは、明治以降の日本において、「日本」的なるものという記号がいかにか作用し、いかにか現代の日本社会において作用しているかという問題を、アメリカの研究者ハリー・ハルトゥーニアン⁷⁾の分析に準拠しながら考察したものである。

ハルトゥーニアンは、1980年に発表された「大平総理の政策研究会」⁷⁾の報告書を分析しながら、これがその後の日本社会に与えた影響について考察する。まず「大平総理の政策研究会」の報告書について、ハルトゥーニアンは次のように述べる。

1979年4月、新しい「文化の時代」構想のために選ばれたグループの最初の会合で大平首相はこう発言している。

わが国は戦後三十余年、経済的発展を求めて脇目もふらず邁進し、そうすることによって顕著な成果を収めてきた。それは、殊に明治以降の百余年において、欧米先進諸国を手本として進めてきた近代化、工業化の偉大な成果でもあった。

加えて彼がいうには、「これまでにない自由と豊かさが」「産業化と近代合理主義のもとで見失われた人間の内面にたいする思いをうながし」た。人びとが「家庭や地域や職場におけるあたたかい人間関係の」「回復」を求めるようになったということは、「近代合理主義にもとづく物質文明が飽和点に達し、

近代（産業化）から文化を強調する新たな時代へと超えるべき時代が来たこと」を示すものである。こうした観点から大平氏の顧問団（「大平総理の政策研究会」＝引用者注）は、かつて「近代化」と「経済成長」が要請された時代には、目的やモデルが西洋のものそのまま、「われわれの伝統文化を無視し、他者が導く進歩、基準、目的がわれわれにあてがわれた」とする。そこでこのテキストが強調するところの、文化に捧げられる新時代の要請とは、真に「全体的な日本文化」の確立である。ただし近代化の終焉にあたって近代を超克するには、あらためて「日本文化の特質」を体系的に査定しなければならない（Harootunian 1989 : 210）

ハルトゥーニアンによれば、大平政権は保守主義の新しい要素として、近代合理主義に代わる新しい「全体的な日本文化」の確立を要請した。ここで「近代合理主義」の欠陥として挙げられているのは、「家庭や地域や職場におけるあたたかい人間関係の」欠如であり、すなわち疎外の問題である。これは、1960年代の高度経済成長以降のさまざまな社会問題を「近代合理主義にもとづく物質文明が飽和点に達し、近代（産業化）から文化を強調する新たな時代へと超えるべき時代が来たこと」という問題設定にすり替えるものであった。

また、この「全体的な日本文化」なるものも、じっさいには日本の企業組織を投影したものにすぎないとハルトゥーニアンはいう。

それは社会構成のその他全域に適応されているが、もはや管理者と実行者の区分さえ容れないところまで来ている。昨今の「日本型管理主義」にかんする数えきれない出版物や記事を参照するまでもなく、製品の質を統制する会議の「刺激的な」報告、管理者と労働者一体の協力体制、英雄的自己犠牲、ボスが

腕まくりして労働者に混じって働く感動的な姿などは十分知れわたっているだろう。これらはじつに効果的に、労働、管理、生産形態の分割を削除し、誰も彼も皆が、人間的な選択や欲望に左右されずに、合理的に自己操作するロボットミミックな構造のなかで共存しているような図である (Harootunian 1989 : 222-3)。

このように、企業組織に範をとった「全体的な日本文化」の像は、それだけでじゅうぶんにナショナリズム的なイデオロギーとってよいものである。しかし、このような像をつくった人々の思考は、まがりなりにも「疎外」を問題として、その解消を「日本」という記号の枠内で解決しようと考えているのである。このような思考の試みは、企業をモデルとして、その集団性を拡張しながら「疎外」の解消を志向するユートピア的な試みといっても過言ではないだろう。

4.3 今後の日本の文化研究にあたって

この章では、資本主義とナショナリズムについて、それぞれに「ユートピア」概念の適用可能性を考えてきた。そこで、今後の日本の文化研究について、「ユートピア」概念の適用可能性を展望したところで、この論文を終わりにしたい。

現在、日本政府は「クール・ジャパン」を成長戦略として重要な位置づけを与えている。これは、日本のサブカルチャーを大々的に文化産業として振興しようというものである。

しかし、クール・ジャパンとしてもはやされる日本のサブカルチャーが、そもそも世界の「クール」とどのような関係にあるかは、かなり判断が難しい問題である (梅原 2013 : 212-3)。ただし、クール・ジャパンがナショナリズム的な色彩をもつことは、数多く指摘されているところである (そのさい、ハルトゥーニアン「日本」という枠組みの分析も役に立つだろう)。

ここで分析が考えられるレベルは2つある。ひ

とつはサブカルチャー自体の動向であり、もうひとつはそれを利用しようとする日本政府ならびにその周辺の知識人である。サブカルチャーはどのように日本の社会をとらえ、表象しているのか。そこにあらわれる新しい集団性や疎外なき世界の願望とはどのようなものだろうか。また、それを産業化しようとする政府や知識人は、どのような想像力 (とその限界) をもって、それにのぞんでいるのか。そして、彼・彼女らが描く「ユートピア」とは、どのような社会的条件を必要とし、そこからどのようなプロセスをもって生み出されるのだろうか。これらの問題を分析するさいに、ジェイムソンの「ユートピア」概念は、手法として大きな意義をもつと考えられるのである。

注

- 1) Jameson, Fredric, 1991, "Postmodernism, or, The cultural logic of late capitalism", Durham: Duke University Press
- 2) Jameson, Fredric, 1984, *Sartre: the origins of a style*, New York: Columbia University Press Morningside ed. (=三宅芳夫・谷岡健彦・水溜真由美・太田晋・松本徹臣・近藤弘幸訳, 1999, 『サルトル——回帰する唯物論』論創社)
- 3) このSpuren (痕跡) という言葉は、ブロッホの初期のエッセイ集の題名でもある。Bloch, Ernst, [1930]1984, *Spuren*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=菅谷規矩雄訳, 1969, 『未知への痕跡』イザラ書房)
- 4) アハスエルスとは、ヨーロッパの伝説に語られる永遠に呪われた放浪者のことで、いわゆる「さまよえるユダヤ人」のことである。
- 5) ここに「近代芸術」と書かれているのは、表現主義やカンディンスキーなどの絵画・シェーンベルクなどの音楽をさすモダニズム芸術のことである。モダニズムの問題はそれだけで膨大な議論を必要とするが、ホルクハイマーとアドルノは、モダニズム芸術をもっとも芸術として重要なものと考えていた。それに対し、ここでいう「俗物」とは、

モダニズム芸術を「不健康なもの」として解さない人々である。おそらく、そのもっとも極端なタイプが、モダニズム芸術などを「退廃芸術」として弾圧し、「退廃芸術展」によってさらしものにしたアドルフ・ヒトラーであろう。

- 6) 原語は front region。もともとはアーヴィング・ゴッフマンの概念で「特定のパフォーマンスを準拠点とした場合、そのパフォーマンスが行なわれる場所をいい表わす」(ゴッフマン 1959: 125)ものである。これに対して、「特定のパフォーマンスに対して、当該パフォーマンスが人に抱かせた印象が事実上意識的に否定されている場所」が「裏一局地」(back region)あるいは「舞台裏」(back stage)である。ここでの引用文ならびに用語の訳は、石黒毅に従っている。マグウィガンは裏一局地が何であるかを語っていないが、おそらくは「クール」を商品化しつつ、システムを支えるモノとして用いる資本主義のメカニズムのことであろうと考えられる。
- 7) 大平総理の政策研究会とは、1978年に首相に就任した自由民主党の大平正芳が、従来の自由民主党の政策に代わる新しい保守主義を考えようとして、知識人や官僚を動員して作り上げた研究会である。大平没後の1980年に報告書を提出して解散した。それをめぐる経緯と問題については(北山 2010)を参照のこと。また政治学者の姜尚中や社会学者の高原基彰も、この研究会の重要性を指摘している。

【参考文献】

- Bloch, Ernst, 1959, *Das Prinzip Hoffnung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (= 2012-3, 山下肇・瀬戸鞏吉・片岡啓治・沼崎雅行・石丸昭二・保坂一夫訳『希望の原理』白水社.)
- Harootunian, Harry D, 1989, "Visible Discourse/Invisible Ideologies" Masao Miyoshi and H.D.Harootunian eds *Postmodernism and Japan*, Durham and London: Duke University Press. (= 高祖岩三郎訳, 2010, 「見える言説, 見えないイデオロギー」ハリー・ハルトゥーニアン『歴史と記憶の抗争—「戦後日本」の現在』みすず書房.)
- Horkheimer, Max und Theodor Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, Amsterdam: Querido Verlag. (= 2007, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店.)
- Jameson, Fredric, 1971, *Marxism and Form*, Princeton: Princeton University Press. (= 1980, 荒川幾男・今村仁司・飯田年穂訳『弁証法的理性の冒険』晶文社.)
- Jameson, Fredric, 1983, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*, Cornell: Cornell University Press. (= 2010, 大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳『政治的無意識—社会的象徴行為としての物語』平凡社.)
- Jameson, Fredric, 1990, *Late Marxism: Adorno, or, The Persistence of the Dialectic*, New York: Verso (= 2013, 加藤雅之・大河内昌・箭川修・齋藤靖『アドルノ—後記マルクス主義と弁証法』論創社.)
- Jameson, Fredric, 2009, "Utopia as Replication," Fredric Jameson eds *Valences of Dialectic*, New York: Verso, 410-434
- McGuigan, Jim, 2009, *Cool Capitalism*, London and New York: Pluto Press
- 北山晴一, 2010, 「80年代を語ることの意味 (2)」21世紀社会デザイン研究 (8).3-30.
- 梅原宏司, 2013, 「クール資本主義とは何か?—ジム・マグウィガンが描く現代世界の一つの文化的側面について—」応用社会学研究 55. 205-217.
- 梅原宏司, 2013, 「日本国家の歴史における『文化』という記号の変容—「文化」が指し示すものはどのように変化したか—」Social Design Review (3). 100-112.

